

日貫地区視察の感想

(株)大隆設計 長嶺元二

三陸地方には「津波てんでんこ」という言い伝えがあるそうだ。言わずもがな、津波がきたら、てんではばらばらに、とにかく逃げろという意味である。それでも津波があってから三世代も経つと、津波に対する恐怖は薄れていき、人々は再び海岸端に居住するようになる。そして再び津波に襲われる。三陸の人々はこれを繰り返した。何度も経験しているのにね・・・被災当時、他人事のような感想も巷で聞かれた。

今回、昭和47年に大水害を受けた町を訪ね、当時被災した土地の今を見て回った。ある集落で通りがかりの老人に私は声をかけた。「この土地で洪水を経験されたことをお孫さんとか家族に話されますか」。すると案外な返事をいただいた。「そりゃあ話しするけど、信じてもらえない」。当時の写真はすべて流され、その激しさ、恐ろしさを伝えるものが何もないのだそうだ。

その一方で、桜江町の街外れで、水害当時の写真を本堂にパネル展示しているお寺に偶然出くわした。住職が熱心なお方で、小学生に向けての勉強会も催しているそうだ。

私は記録に残すことの大切さを実感した。学会誌をめくると災害があるたびに特集が組まれ、毎度同じような写真や記事が載っているのに辟易していたが、少々反省した。それにしてもこの国は災害がなんと多いことか。